

宗祖における三聖派遣説

芹澤寛隆

目次

- 一、問題の所在
 - 二、「清浄法行経」とは
 - 三、宗祖・道元における「三聖派遣説」
 - 四、宗祖における垂迹
 - 五、まとめ
- 一、問題の所在

日蓮大聖人（一一二二—一一八二）（以下、宗祖と称する）の遺文には多くの人物・説話が引用され、活用されている。その中でも特に発表者が関心を抱いているのが、孔子や老子といった中国思想上の聖人^{せいじん}たちである。宗祖御遺文を確認すると、引用回数は非常に多く特に孔子は、二〇か所の引用があり、中国史上の人物としては最多

の引用がなされている。⁽¹⁾

宗祖は「開目抄」⁽²⁾において、学ぶべきものとして外典（儒教）、外道、内典（仏教）の三つを挙げた上で相對を行い、優れたものとして内典を挙げて、最終的には「法華經」を中心とした世界觀に組み込んでいる。その中で宗祖は外典の聖人である孔子や老子に対して、仏教に準じる五常を守る者として一定の評価を与えている。

それに対して、ほぼ同時代の道元（一一〇〇—一二五三）はその著作である「正法眼藏」⁽³⁾において、儒教、特に儒仏道（儒教・仏教・道教）の三学を一致とする説を強く批判しつつ、孔子等の聖人を、論ずるに足らない存在としている。

こうしたスタンスの違いは何によるものなのか、本論では両者がその著作中で引用している「仏説清淨法行經」（以下、「清淨法行經」と略する）に示される「三聖派遣説」を題材として考察したい。なお、本論は芹澤が昨年度東北大学に提出した博士論文の第四章の一部にさらに考察を加えたものである。

二、「清淨法行經」とは

「清淨法行經」とは望月信享著「仏教大辞典」⁽⁴⁾によると

現今傳はらざるが故に其の内容の委細を知るを得ざるも、其の中に老子、孔子及び顔回を摩訶迦葉等の應化となすの説を出せるを以て有名なり。（中略）此の經が偽經なることは固より辯を俟たざる所。⁽⁵⁾

とある。この「清淨法行經」についての研究としては石橋成康氏の研究⁽⁶⁾や野村卓美氏の研究⁽⁷⁾がある。近年、現存が確認され、それによると「三聖派遣説」は「清淨法行經」中にあることが確認された。最近まで現存が確認さ

れていなかった「清浄法行經」の存在が認められている理由としては望月氏が述べているように、宗派を問わず様々な人物によつて「三聖派遣説」が「清浄法行經」に曰く、という形で引用されているためである。石橋氏、野村氏によつて確認された日本撰述書にみる「清浄法行經」の引用に、発表者が確認し追加したものは以下の通りである。宗祖以前もしくは宗祖と同時期の著作について主なもののみではあるが、該当する箇所を示す（以下、傍点、傍線は発表者が付した）。

・善珠述「唯識義燈增明記」卷第一「大正」六五卷、三三九頁A

三聖者、蓋是孔子、李老、顏淵也。孔子後人、故不入三教也。此等三人雖興俗典。乃是大權菩薩。佛說清淨行經云。儒童菩薩彼稱孔丘。解云。作孝經云孔子者魯人也。姓孔。名丘。字仲尼。有聖德生於周末。歷國画像應躬莫能見聞。乃判詩書。定禮樂。修春秋。

述易道。門徒三千。達者七十二人。博徒學問者有其六萬。准阿含經中。孔子弟子七十二人總是大權菩薩。爲調伏衆生故。設此方便潛在俗中。光淨童子菩薩彼稱顏淵。謂顏回。是故清淨法經云。孔・顏二賢以爲師弟。

說孝經五千文。迦葉菩薩彼種老子。說老子五千文。

・安然撰「悉曇藏」卷第一、卷第二「大正」八四卷、三六八頁B、三八二頁B

如清淨法行經云。迦葉爲老子。同明。儒童爲顏淵。光淨菩薩爲孔子也。若如前解佛則認歸。若如後解方便施與

清淨法行經云。我遣三人漸教衆生。迦葉菩薩彼名老子。儒童菩薩彼名孔子。光淨菩薩彼名顏回

・選者未詳「耀天記」山王事「神道大系」日吉

清淨法行經ノ中ニ、尺尊ノ我遣三聖、化彼震旦ト仰ラレタル文ヲ尺給ニハ、迦葉菩薩、彼稱老子、光淨菩薩、光明童子

彼稱仲尼、月光菩薩、光明童子彼稱顏回ト侍トカヤ、佛ノ御使ニテ、圓頓教法ヲ宣給ヘル人ナレバ、釋迦如來ノ善巧

ノアリサマヲ、能々伺ヒ得給ヘル上ニ、ヨモ又僻事ハシ給ハジト覺侍也⁽¹⁾

・證眞撰「止觀私記」卷第六末「大日本佛教全書」三七卷、一五五頁B

清淨法行經者。諸文引用不同。淨名玄。涅槃疏等云。迦葉名老子。光淨名仲尼。儒童號顏淵。破邪論等云。

儒童稱孔丘。光淨名顏回。^{至云}應是經本不同。

・良忠述「觀經玄義分傳通記」卷第五「淨土宗全書」第二卷、一八五頁下

清淨法行經云。吾今先遣弟子三聖悉是菩薩。往彼示現魔訶迦葉稱老子、光明童子稱仲尼、月明儒童號顏淵。

・良忠述「觀經玄義分略鈔」卷第二「淨土宗全書」第二卷、四七五頁上

上品三人是遇大凡夫中品三人是遇小凡夫事

問中品下生世福爲受法、是佛法外世善也。何故中品三生總云遇小哉。答五常五戒當故小乘屬也。孔子五常約

能化善巧者小乘教也。清淨法行經云。我遣弟子三聖化彼震旦、迦葉菩薩彼云老子、儒童菩薩彼云孔子、光淨

菩薩彼名顏淵。

・日蓮撰「開目抄」【定遣】五三六頁

・無住撰「沙石集」卷第一「日本古典文学大系」八五卷、岩波書店、昭和四一年、六一頁

漢朝ニハ、佛法ヲ弘ム爲ニ、儒童・迦葉・定光ノ三人ノ菩薩、孔子・老子・顏回トテ、先外典ヲ以テ人ノ心

ヲ和ゲテ、後ニ佛法ヲ流布セシカバ、人皆是ヲ信ジキ

・了尊撰「悉曇輪略圖抄」卷第七「大正」八四卷、六九〇頁B

弘決云。我遣三聖等者。清淨法行經云。月光菩薩彼稱顏回。光淨菩薩彼稱仲尼。迦葉菩薩彼稱老子文清淨法

行經云。

・頼宝撰『釈摩訶衍論勘注』卷第三「大正」六九卷。六二五頁B

湛然弘決云。清淨法行經云。迦葉菩薩彼名老子。儒童菩薩彼名孔子。光淨菩薩彼名顏回

・慈遍撰『豐葦原神風和記』卷下「統々群書類從」第一

清淨法行經ノ文ニ佛三聖ヲ兼テ震旦ニ遣シ禮儀ヲ先ヅ開キ然後ニ大小乗ノ經ヲワタスベシト云ヘリ。三聖ト云ハ八月光菩薩ハ八顏回ナリ。光淨菩薩ハ仲尼也。迦葉菩薩ハ老子也ト。

・珍海撰『三論玄疏文義要』卷第二「大正」七〇卷、二二三頁B

清淨法行經云。佛遣三弟子振旦教化。儒童菩薩彼稱孔丘。光淨菩薩。彼云顏回。摩訶迦葉彼稱老子

・覺憲撰『三國傳燈記』

・伝菅原為長作『天神講式』⁽¹⁶⁾第一段「神道大系」北野

或經云、我滅後之後、於末法中、現大明神、為說空法云々、如來之誠言如斯、薩埵之權化無疑、又清淨法行

經云、我今先遣弟子三聖、悉是菩薩也、往彼示現摩訶迦葉稱老子、光明童子稱仲尼、月明童子稱顏淵云々、

此三菩薩等、生人間兮弘儒學、在夢後以為神明、今觀自在菩薩、現天滿天神

・道元撰『正法眼藏』第十 四禪比丘「大正」八二卷、二九八頁C

・中觀澄禪撰『三論玄義檢幽集』⁽¹⁸⁾卷第二「大正」七〇卷、四〇六頁B

涅槃疏第九曰。若如他所明止言釋迦教是佛法。周孔莊老等此是外道法今明。皆是佛法。何故爾。佛説人天五乘世出世教依河西判莊子等皆是人乘。老子則是天乘。豈非佛法耶。故淨法行經中自明老子則是迦葉等此釋所有文字皆是佛説也。

・貞海撰『三論玄義鈔』卷上「大正」七〇卷、五〇四頁A

- ・聖阿述「伝通記糅鈔」卷十八「浄土宗全書」三、四二五頁下
- ・聖阿述「釈浄土二藏義」卷第廿八「浄土宗全書」十二、三三三頁下
- ・沙弥玄棟撰「三國伝記」卷第十二 第十七
- ・加祐述「観念法門私記私鈔」卷下「浄土宗全書」四、三三四頁
- ・覚眼撰「三論玄義誘蒙」卷上「大正」七〇卷、五三六頁C
- ・圓智・義山述「圓光大師行状画図翼賛」卷廿三 卷六十「浄土宗全書」十六、三六五頁上、九六一頁上、
下

・萬仞道担撰「三教一致弁」『永平正法眼藏蒐書大成』二十⁽¹⁹⁾

以上、二四例はいずれも「三聖派遺説」を引用している。その中で人物の比定にはいくつかのパターンがある。「清浄法行経」の本文を踏まえ、野村氏は中国撰述、日本撰述に分けた上で分類している。その分類のうち日本撰述のものを当てはめると以下ようになる。

I型 「摩訶迦葉↓老子」「光浄菩薩↓仲尼」「月明儒童↓顔淵」 「清浄法行経」と同じ

安然撰「悉曇藏」、了尊撰「悉曇輪略図抄」、

II型 「儒童菩薩↓孔丘」「光浄菩薩↓顔淵」「摩訶迦葉↓老子」 「広弘明集」に依ると考えられる

善珠述「唯識義燈増明記」、珍海撰「三論玄疏文義要」、中観澄撰「三論玄義檢幽集」、貞海撰「三論玄義鈔」、覚慈撰⁽²⁰⁾「三國傳燈記」、良忠述「観經玄義分略鈔」

III型 「月光菩薩↓顔回」「光浄菩薩↓仲尼」「迦葉菩薩↓老子」 「摩訶止観輔行伝弘決」⁽²¹⁾（以下「弘決」と略す）に依ると考えられる

宗祖撰「開目抄」、了尊撰「悉曇輪略因抄」、選者未詳「耀天記」、道元撰「正法眼藏」、慈遍撰「豊葦原神風和記」

IV型 「儒童菩薩↓顔回」「浄光菩薩↓仲尼」「大迦葉菩薩↓老子」 「折疑論」に依ると考えられる
日本撰述書には無い。

V型 「摩訶迦葉↓老子」「光明童子↓仲尼」「月明儒童↓顔淵」 日本独自のもの。誤植の可能性あり

良忠述「觀經玄義分傳通記」、伝菅原為長作「天神講式」、聖阿述「釈浄土二藏義」

以上より、宗祖による「三聖派遣説」はⅢ型の「弘決」の孫引きであったことが分かる。また、先に挙げた例には「弘決云」としながらも人物の比定が異なる例や同一人物でも引用のパターンが異なるケースもある。その他、證眞のように、Ⅰ型、Ⅱ型を示しつつ、諸本の不同を指摘する例もある。こうした点については今後さらに検討を加えたい。次に、宗祖、道元それぞれの「三聖派遣説」に関係する記述を引用する。

四、宗祖・道元における「三聖派遣説」

両者ともに「弘決云」もしくは「古徳（湛然）云」とあるように、湛然（七一―七八二）撰の「弘決」を引用している。「弘決」には

三授藥中。亦先總舉藥病。衆生下別明授藥。先明授世法藥中。如孔丘等者。姓孔名丘字仲尼。周公姓姬名旦。制禮作樂五德行世。佛教流化實頼於茲。禮樂前驅眞道後啓。元古混沌未宜出世者。佛教明劫不須此名。且寄此土化初而説。我遣三聖等者。亦云震旦具如前説。清淨法行經云。月光菩薩彼稱顔回。光淨菩薩彼稱仲尼。

宗祖における三聖派遣説（芹澤寛隆）

迦葉菩薩彼稱老子。天竺指此震旦爲彼。准諸目錄皆推此經以爲疑僞。文義既正或是失譯。²²
とある。湛然は「清淨法行經」を引きつつ「准諸目錄皆推此經以爲疑僞。」とあるようにこの經には疑わしい点があるとしている。

・宗祖における「三聖派遣説」

難云若爾者今世災難依破五常者何必云選択流布失乎。答曰仏法未渡漢土前黄帝等以五常治国。其五常渡仏法後見之即五戒也。老子・孔子等亦仏遠鑑未來和国土爲令信仏法所遣三聖也。²³

答えて曰く、仏法はまだ漢土に渡らざる前は、黄帝等五常を以て國を治む。その五常は、仏法渡りて後これを見れば、すなわち五戒なり。老子・孔子等もまた仏遠く未來を鑑み、国土に和し、仏法を信ぜしめんがために遣すところの三聖なり。

孔子が此土に賢聖なし、西方に仏國という者あり、此聖人なりといひて、外典を仏法の初門となせしこれなり。礼楽等を教て、内典わたらば戒定慧をしりやすからせんがため、王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝高きことをしらしめ、師匠を教て帰依をしらしむ。

妙楽大師云 仏教流化実頼於茲。礼楽前駢真道後啓等²⁴。天台云 金光明經云 一切世間所有善皆因此經。

若深識世法即是仏法等²⁵。止観云 我遣三聖化彼真丹等²⁶。弘決云 清淨法行經云 月光菩薩彼称顔回 光淨

菩薩彼称仲尼 迦葉菩薩彼称老子。天竺指此震旦爲彼等²⁷

例ば儒家の本師たる孔子・老子等の三聖は仏の御使として漢土に遣されて、内典の初門に礼楽の文を諸人に教たり。止観に（金光明）經を引て云、我遣三聖化彼震旦等²⁸

宗祖は佐前の書である「災難興起由来」から佐後の書である「下山御消息」に至るまで一貫して三聖派遣説を

受容している。また、その出典を確認すると「開目抄」において「弘決」と「摩訶止観²⁶」の双方を引用し、出典としている事がわかる。また、その他の遺文でも「弘決」の内容を要約しつつ「三聖派遺説」を受容しているが、否定はしていない。またその活用姿勢は積極的に用いるというものではないが、仏法伝来以前の震旦における次善的理想として認識している事が言えると思われる。また、宗祖が「三聖派遺説」を御遺文中に示すときは、震旦における仏教と儒教（老莊思想）の關係を示すときと治国の在り方についての前例を示すときの二つが重なったときに限定される。単なる歴史の叙述や治国について述べた場合には示されない。後述するが、こうしたタイミングに宗祖における相承觀を見ることができると思われる。

・道元における「三聖派遺説」

道元における「三聖派遺説」は「正法眼蔵」中に確認できる。長文であるが關係する箇所を引用する。

ムカシヨリ名相ニマヨフモノ。正理ヲシラサルトモカラ。佛法ヲモテ。莊子老子ニヒトシムルナリ。イササカモ佛法ノ稽古アルトモカラハ。ムカシヨリ莊子老子ヲオモクスル。清淨法行經ニ曰ク。月光菩薩。彼二稱シ顔回ト。光淨菩薩。彼二稱シ仲尼ト。迦葉菩薩。彼二稱ス老子ト云云。ムカシヨリコノ經ノ說ヲ擧シテ。孔子老子等モ菩薩ナレハ。ソノ說ヒソカニ佛說ニオナシカルヘシ。イトトマタ佛ノツカヒナラン。ソノ說オノツカラ佛說ナラントイフ。コノ說ミナ非ナリ。古徳曰ク。準スルニ諸ノ目錄ニ。皆ナ推メ此ノ經ヲ。以テ爲ス疑僞ト云云。イマコノ說ニヨラハ。イヨイヨ佛法ト。孔老トコトナルヘシ。ステニコレ菩薩ナリ。佛果ニヒトシカルヘカラス。マタ和光應迹ノ功德ハ。ヒトリ三世諸佛菩薩ノ法ナリ。俗塵凡夫ノ所能ニアラス。實業ノ凡夫。イカテカ應迹ニ自在アラン。孔子イマタ應迹ノ說ナシ。イハンヤ孔老ハ先因ヲシラス。當果ヲトカス。ワツカニ一世ノ忠孝ヲモテ。キミニツカヘ。家ヨラサムル術ラムネトスルナリ。サラニ後世ノ說ナ

シ。ステニコレ斷見ノ流類ナルヘシ。莊老ヲキラフニ。小乗ナホシラス。イハンヤ大乘ヲヤトイフハ。上古ノ明師ナリ。(中略)カクノコトクノ摩子オホカルコトヲ古徳曰ク。如キハ孔丘姫旦ノ之語。三皇五帝之書ノ。孝ハ以テ治メ家ヲ。忠ハ以テ治メ國ヲ。輔ハ以テ利ス民ヲ。只夕是レ一世ノ之内。不渡ラ過未ニ。未タ齊カラ佛法ノ之益スルニ於三世ヲ。豈不シヤ謬ラ乎。マコトナルカナ古徳ノ語。ヨク佛法ノ至理ニ達セリ。世俗ノ道理ニアキラカナリ。三皇。五帝ノ語。イマタ轉輪聖王ノヲシヘニオヨフヘカラス。梵王。帝釋ノ説ニナラヘ論スヘカラス。統領スルトコロ。所得ノ果報。ハルカニ劣ナルヘシ。輪王。梵王。帝釋。ナホ出家受具ノ比丘ニオヨハス。イカニイハンヤ如來ニヒトシカラシヤ。孔丘姫旦ノ書。マタ天竺ノ十八大經ニオヨフヘカラス。四韋陀ノ典籍ニナラヘカタシ。西天婆羅門教。イマタ佛教ニヒトシカラサルナリ。ナホ小乘聲聞教ニヒトシカラス。アハレムヘシ震旦。小國邊方ニシテ。三教一致ノ邪説アルコトヲ第十四祖龍樹菩薩ノ曰ク。大阿羅漢。辟支佛ハ。知り八萬大劫ヲ。諸ノ大菩薩ハ。及ヘリ知ルニ無量劫ヲ。孔老等イマタ一世ノウチノ前後ヲシラス。一生二生ノ宿通アランヤ。イカニイハンヤ一劫ヲシランヤ。イカニイハンヤ百劫千劫ヲシランヤ。イカニイハンヤ八萬大劫ヲシランヤ。イカニイハンヤ無量劫ヲシランヤ。コノ無量劫ヲアキラカニテラシシレルコト。タナココロヲミルヨリモアキラカナル諸佛菩薩ヲ。孔老等ニ比類セン。愚闇トイフニモタラサルナリ。ミミヲオホフテ。三教一致ノ言ヲキクコトナカレ。邪説中最邪説ナリ。ミミ

道元は儒仏道三教を一致と見做す考えを強く否定している。その中で「清淨法行經」を引きつつ、「コノ説ミナ非ナリ。」とし、湛然を引きつつ「三聖派遣説」を否定している。

・ 両者における共通点

両者における共通点としては、儒家の忠孝が三世に渡らず、今世に限るとしている点である。前記の「開目

抄」には

いまだ過去未来を一分もしらず。玄者、黒也、幽也。かるがゆへに玄という。但現在計しれるににたり。現在にをひて仁義を製して身をまほり、国を安ず。此に相違すれば族をほろぼし家を亡等いう。此等の賢聖の人々は聖人なりといえども、過去をしらざること凡夫の背をみず、未来をかがみざること盲人の前をみざることがとし。(中略)、過去未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖にあらず。

とあり、「正法眼藏」には

孔子イマタ應迹ノ説ナシ。イハンヤ孔老ハ先因ラシラス。當果ヲトカス。ワツカニ一世ノ忠孝ヲモテ。キミニツカヘ。家ヨラサムル術ヲムネトスルナリ。サラニ後世ノ説ナシ。ステニコレ斷見ノ流類ナルヘシ。(中略)如キハ孔丘姫旦ノ之語。三皇五帝之書ノ。孝ハ以テ治メ家ヲ。忠ハ以テ治メ國ヲ。輔ハ以テ利ス民ヲ。只タ是レ一世ノ之内。不渡ラ過未ニ。未タ齊カラ佛法ノ之益スルニ於三世ヲ。豈不ンヤ謬ラ乎。マコトナルカナ古徳ノ語。

とあり、三世にわたる忠孝を説いている仏教の優位性を認めている。

・両者の相違点

「三聖派遣説」を説いている箇所における両者の相違点は、応迹(垂迹・再誕・応現・出現)³⁰を認めているか否かという点である。宗祖は、「三聖派遣説」自体を否定していないため、震旦(中国)の孔子や老子が天竺(印度)の菩薩の応迹であるという点を認めている。しかし、道元は

和光應迹ノ功德ハ。ヒトリ三世諸佛菩薩ノ法ナリ。俗塵凡夫ノ所能ニアラス。實業ノ凡夫。イカテカ應迹ニ

自在アラン。孔子イマタ應迹ノ説ナシ。イハンヤ孔老ハ先因ヲシラス。當果ヲトカス。ワツカニ一世ノ忠孝ヲモテ。キミニツカヘ。家ヨヲサムル術ラムネトスルナリ。サラニ後世ノ説ナシ。ステニコレ斷見ノ流類ナルヘシ。（中略）諸佛菩薩ヲ。孔老等ニ比類セン。愚闇トイフニモタラサルナリ。ミミヲオホフテ。三教一致ノ言ヲキクコトナカレ。邪説中最邪説ナリ。⁹¹

とあるように、三聖の応迹を否定し「三聖派遣説」および三教一致説を「邪説中最邪説ナリ」と断じている。その根拠として、そもそも「三聖派遣説」はそれを紹介した湛然自身が「准諸目錄皆推此經以爲疑僞」と述べていること、また曹洞禪にとって、重要な法門である相伝を考えたときに、轉輪聖王にも劣る三聖の応迹は認められないという点が根拠となっていると考えられる。

この両者の解釈の違いは何によるものなのであろうか。

五、宗祖における垂迹

宗祖が「三聖派遣説」のような垂迹（応迹・再誕・応現・出現）を認めている理由は何であるのか、その理由と考えられるのは以下の点である。

・先師の見解の受容

先に宗祖以前もしくは同時期の者による「三聖派遣説」を挙げたが、そのいずれの場合でも否定はされていない。證真も「諸文引用不同」とは述べているが、この説の否定はしていない。もちろん、より多くの文献の確認を行い、検討を加える必要があるが、宗祖のように「三聖派遣説」を認めるといのが当時の主流の考えだった

のではないだろうか。

・宗祖における説話活用態度

宗祖は自身の生涯においてどのようなタイミングで「説話」や人物を自身の文章や曼荼羅の中で用いたのだろうか。宗祖には依経とした「法華経」中に出てくる経文であっても、自身の境遇や立場によって、文章中に反映させないという例が存在することが確認できる。「法華経」の「観世音菩薩普門品」に「或は怨賊の逸んで各刀を執つて書を加うるに値わんに」という文言がある。宗祖は文永八年（二七二）に鎌倉龍の口にて、斬首されそうになっている。この事件について宗祖はしばしば自身の文章中で示しているが、そこにこの経文を引用した例は無い。この経文はあくまでも観音菩薩信仰の結果が示されており、宗祖は観音信仰を持たなかったために、自身の経験と類似した経文であっても、それを例として引用するということとはなかった。また、同じく「法華経」の「勸持品」に「数数擯出せられ」とあり、自身の二度の流罪はこの経文の通りであるとして、こちらも何度も引用しているが、この経文が「宗祖遺文」中に出てくるのは、二度の流罪を経験した後であり、それ以前の文章には一切登場しない。

その他にも「法華経」「五百弟子受記品」中に示される「阿那律」が普明如来になるといふ授記を確認すると、真蹟現存のものには、普明如来になるといふ授記は示されないが、日興写本のみ、その授記が示されている。これらの事例のように、宗祖は「法華経」や「弘決」、「法華文句記」等をそのまま引用するのではなく、宗祖自身の考えをもって、もしくは自身の解釈に関連する文献を用いての引用の可能性も考えることができる。そうした宗祖独自の認識として以下の点が挙げられる。

・天台大師再誕説の受容

天台大師のエピソードとして、その弟子である灌頂の撰である「隋天台智者大師別傳」に「昔日靈山同聽法華宿縁所追今復來矣。」とあり、天台大師とその師である慧思が共に印度の釈迦が「法華經」を説いた靈鷲山にいたという説話がある。この説話を宗祖は

像法中末觀音藥王示現南岳天台等出現以迹門為面以本門為裏百界千如一念三千尽其義。

像法の中末に觀音・藥王・南岳・天台等と示現し、出現して、迹門を以て面となし、本門を以て裏となして、百界千如・一念三千その義を尽くせり。

後五百年之前其中間一百年之間 南岳・天台等出現於漢土 粗弘宣法華之實義。

後五百年の前その中間一百年の間に、南岳・天台等漢土に出現して粗法華の實義を弘宣したもう。

と延べ、受容していることがわかる。この説話を道元は受容していない。インドと中国という異なる国の間で同じ人物が出現することがあるという認識が、「三聖派遣説」を認めるという意識に繋がったと考えられる。

・宗祖における相承意識

宗祖における相承は、宗学上、外相承と内相承に区分される。外相承とは三國四師相承のことであり宗祖にいたる法華經の信仰系譜を歴史的現実の面からみたものである。それはインド・中国・日本に亘る釈尊・天台大師・伝教大師の三國三師である。「顕仏未來記」に

天台大師信順釈迦、助法華宗敷揚震旦、叡山一家相承天台助法華宗弘通日本等云云。安州宗祖恐相承三師助法華宗流通末法。三加一号三國四師。

天台大師は釈迦に信順し、法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す等云云。安州の宗祖は恐らくは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す。三に一を加えて三國四師

と号づく。

とあるように伝教大師滅後の日本天台宗は、慈覚大師円仁や智証大師円珍等によって密教化され、伝教大師の法華経信仰の精神を喪失したとし、自己の法華経信仰の系譜を釈尊・天台大師・伝教大師にもとめ、その正統性を主張したのである。また内相承とは宗祖の内証における法華経信仰の相承であり、信仰の内実は釈尊に直結する純粹な法華経信仰である。すなわち先に挙げた宗祖自身による上行菩薩自覚が釈尊に直結するものが内相承なのである。「法華経」の「如来神力品」に

爾時仏告。上行等菩薩大衆。諸仏神力。如是無量無辺。不可思議。(中略)是故汝等。於如来滅後。应当一心。受持読誦。解説。書写。如説修行。⁽²⁹⁾

とあり、釈尊は自身の滅後の末法に上行菩薩に「法華経」を弘通すべしと付属している。これを受けて、宗祖は自身が上行菩薩であるという自覚、上行菩薩の応迹(応現・再誕)であるという自覚を持っていた。⁽¹⁰⁾これらの相承はいずれも時間、空間を超越している。相伝のように連綿とした継承ではなく、正法を軸とした相承意識であり、その中では時間的・空間的超越は当然のことであるという認識があつたものと考えられる。

・ 全ての世界観を法華経世界に組み込むため

宗祖は「開目抄」において仏典と外典・外道、大乘と小乗、権教と実教、(法華経)本門と迹門、下種益と熟・脱益の五つの相対を行い、「法華経」本門八品に説かれる題目を以て最上のもとし、その中に相対したすべての教えが含まれているとしている。その中で外典に説かれた教えや聖人もまた「法華経」に組み込まれた存在であり、彼らの思想や治世は

仏法已前三皇五帝以五常治国。夏桀・殷紂・周幽等破礼儀喪国遠当仏誓持破也。⁽¹⁾

仏法已前の三皇五帝は五常をもつて国を治む。夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼儀を破りて国を喪すは、遠く仏誓の持破に当れるなり。

とあるように、中国への仏法伝来以前の優れたものであり、仏法伝来以降も

漢土・日本国は仏法已前には三皇・五帝・三聖等の外経をもて、民の心をと、のへてよをば治しほどに、次第に人の心はよきことはかなく、わるき事はかしくなりしかば、外経の智あさきゆへに悪のふかき失をいましめがたし。外経をもつて世をさまらざりしゆへに、やうやく仏経をわたして世間ををさめしかば、世をだやかなりき。此はひとへに仏教のかしこきによて、人民の心をくはしくあかせるなり。

とあるように次善のものとして評価していた。こうした一定の評価が「三聖派遣説」を容認した理由となったと考えられる。

以上のような要因が相まって宗祖における「三聖派遣説」の受容が及び活用がなされたものと考えられる。

これらに対して道元は先に挙げたように聖人を

三皇。五帝ノ語。イマタ轉輪聖王ノヲシヘニオヨフヘカラス。梵王。帝釋ノ説ニナラヘ論スヘカラス。統領スルトコロ。所得ノ果報。ハルカニ劣ナルヘシ。輪王。梵王。帝釋。ナホ出家受具ノ比丘ニオヨハス。イカニイハンヤ如來ニヒトシカラナヤ。

と述べ、三聖は菩薩に比べはるかに劣った存在としている。こうした認識の違いが「三聖派遣説」の解釈の違いとなつて表れていると考えられるのである。

五、まとめ

両者の聖人観を「三聖派遣説」の解釈を基に少しく考察した。この違いは、共に「法華經」を最重要經典としつつもその中に聖人の説や外典を組み込むか否かという点では宗祖は同時代の他の僧たちと同じであった。その上で宗祖結果的に「三聖派遣説」を受容しているという点では宗祖は同時代の他の僧たちと同じであった。その上で宗祖独自の解釈としては「弘決」の引用という形で「三聖派遣説」を受容しつつ、自身の解釈によってその説を容認しているという点から、比叡山の天台教学をベースとしつつ、独自の解釈を加えていることが確認出来た。また、当時の状況から考察すると、むしろ道元の解釈が特殊であったことも確認できた。

今後は、宗祖における垂迹の受容と、宗祖在世当時における本地垂迹説と宗祖の関係についても見ていきたい。

注

- (1) 略称について、立正大学日蓮教学研究編「昭和定本日蓮聖人遺文改訂増補版」身延久遠寺 一九八八年↓「定遺」、「大正新修大藏經」大藏出版株式会社↓「大正」とする。
- (2) 「定遺」五三五頁。
- (3) 「大正」八二卷 七頁。
- (4) 望月信享著「仏教大辞典」武揚堂書店 一九〇九年。
- (5) 望月信享著「仏教大辞典」二六六三―二六六四頁。
- (6) 石橋成康稿「新出七寺藏「清淨法行經」攷」「東方宗教」七八卷、一九九一年、「新出七寺藏「清淨法行經」攷」

- 2―疑経成立過程における「断面」【仏教文化研究】三七卷、一九九二年。
- (7) 野村卓美稿「我が国における疑経『清浄法行経』の受容…三聖派遣説話と舍利信仰（沙加戸弘教授退休記念）『文芸論叢』七八卷、二〇一二年等。
- (8) 愛知県名古屋市中区にある真言宗智山派長福寺（通称、七寺）にて発見された。
- (9) 善珠（七二三―七九七）は法相宗の僧。
- (10) 安然（八四一？―九一五？）は天台宗の僧であり「悉曇藏」は元慶四（八八〇）年成立とされる。
- (11) 「神道大系」の解題によれば承応二年ごろの成立であり、天台系の学僧の筆によるとある。しかしこの箇所については最古の写本に確認されないため、後世の加筆の可能性もある。
- (12) 良忠（一一九九―一二八七）は浄土宗三祖。
- (13) 了尊は真言宗の僧であり本書は弘安十（一二八七）年成立。
- (14) 頼宝（一二七九―一三三〇）は真言宗の僧。
- (15) 慈遍は鎌倉期から南北朝にかけての浄土宗の僧。
- (16) 写本は建武四年（一三三七）のものであるが、諸本によれば菅原爲長が没した寛元四年（一二四六）以前の成立であるとされる。
- (17) 先行研究では「悲華経」とされているが、実際に「悲華経」を確認するとこの記述はない。後世にねつ造もしくは加筆されたものであると考えられる。
- (18) 本書は奥書によると弘安三年（一二八〇）の成立。
- (19) 野村 前掲論文 六五頁・六八頁。
- (20) 覚憲（一一三一―一二二二）。
- (21) 湛然撰「摩訶止観輔行伝弘決」【大正】四六卷一四一頁より。

- (22) 湛然撰「摩訶止觀輔行伝弘決」〔大正〕四六卷、三四三頁C。
- (23) 「災難興起由来」〔定遺〕一五八頁。
- (24) 「開目抄」〔定遺〕五三六頁。
- (25) 「下山御消息」〔定遺〕一三一四頁。
- (26) 「摩訶止觀」〔大正〕四六卷七八頁C段。
- (27) 「正法眼蔵」〔大正〕八二卷二九八頁C段〜二九九頁B段。
- (28) 「開目抄」〔定遺〕五三五〜五三六頁。
- (29) 「正法眼蔵」〔大正〕八二卷二九八頁C段〜二九九頁A段。
- (30) 宗祖は様々な表現で応迹について述べている。その使い方や意味付けについては日蓮門下で様々な意見があるため、その例を併記した。
- (31) 「正法眼蔵」〔大正〕八二卷二九八頁C段〜二九九頁B段。
- (32) 「大正」第九卷、五七頁C。
- (33) 「大正」第九卷、三六頁C。
- (34) 灌頂撰「隋天台智者大師別傳」〔大正〕五〇卷一九一頁より。
- (35) 同右 一九一頁C段。
- (36) 「如来滅後五五百歲始観心本尊抄」〔定遺〕七一九頁。
- (37) 「曾谷入道殿許御書」〔定遺〕八九九頁。
- (38) 「顕仏未来記」〔定遺〕七四三頁。
- (39) 「妙法蓮華経」〔大正〕九卷五二頁A。
- (40) 宗祖は「下山御消息」において「像法一千年が内に入ぬれば月氏の仏法漸く漢土・日本に渡来る。世尊、眼前に

薬王菩薩等の迹化他方の大菩薩に、法華經の半分迹門十四品を讓給。これは又地涌の大菩薩、末法の初に出現せさせ給て、本門寿量品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を、一閻浮提の一切衆生に唱させ給べき先序のため也。所謂迹門弘通の衆は南岳・天台・妙楽・伝教等是也。今の時は世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当れり。而に余愚眼を以てこれを見に、先相すでにあらはれたる歎。」と述べている。日蓮門下では、この文等を以て宗祖が上行菩薩の応現であるという自覚を持ったとしている。

(41) 「災難対治鈔」「定遺」一六九頁。

(42) 「智慧亡國御書」「定遺」一一二八頁。

(43) 「正法眼蔵」「大正」八二卷二九九頁A段。